

小説隆盛と新聞メディア

——明治二〇年前後の新聞小説について

松原 真

一 はじめに

近代日本における小説の歴史は、新聞メディアにはじまる。

明治一〇年（一八七七）、最後の内戦である西南戦争が終結すると、新聞メディアは紙幅を埋める必要と読者を惹きつけるための新たな商品開発の必要に迫られた。その結果、雑報を物語的に長編化したいわゆる続き物（新聞小説）が掲載されるにいたったのである。この『鳥追ひお松の伝』（仮名読新聞、明一〇・一二・一〇—明一一・一一・一一中絶）は『鳥追阿松海上新話』（明一一、錦榮堂）と改題、単行本化されベストセラーとなった。そして、そののちは続々と、小説が紙面を飾り、小説本が出版される状況となる。すなわち、新聞メディアこそが、沈滞していた小説というジャンルを復活させたのである（一）。

約一〇年後、空前の小説熱が到来する。明治一〇年代のとくに後半における西洋翻訳小説や政治小説の叢生、そして坪内逍遙の登場などにより、小説の地位は劇的に向上した。その結果、明治二〇年（一八八七）前後に、日本社会は未曾有の小説隆盛の季節を迎えることになる。以下のような発言がこの時期いたるところでなされている。

● 誠に此節我邦小説の流行ほど喫驚仰天すべきハなし山上に山を重ねる出版の広告小説の吹聴ならざるハなく屋上に屋を架する下宿屋の二階も小説の陳列を見ざるハなく錦上に花を添へる貴嬢の机の辺塗に塗を傳ける野田店の庭の上亦皆小説

ならざるハなし万篇一律陳々相依り見るもの聴くもの皆小説の咄しなり(宮崎三味「世界の著述悉皆小説」やまと新聞、明二〇・四・二四社説)

●近ごろハ古今未嘗有ともいふべき小説流行にして毎朝配達し来る新聞紙を見るに其の広告の過半ハ新小説の出版の報告を以て填めたるが如し予も好める道なれば逐一其の功能書を展読するに政治といひ諷刺といひ寓意といひ時事といひ理学といひ教育といひ甚だしきに至りてハ法理小説、衛生小説といへる名称を附せり政治小説、諷刺小説、寄託小説、寓意小説、科学小説、等世に小説として発行するもの、種類多かるも今日の世界の如きハ幾と稀れるべしと信するなり(須藤南翠

『金香露』序、改進新聞、五・四)

●近年小説の流行する事古來かつ聴きざる処にして是に文化の進歩とも云ふべき歎而して其の種類も亦一ならず政事と云ひ芸と云ひ或ハ寓意或ハ諷刺亦ハ教育亦ハ宗教其他何と唱へ彼と称へ著者が欲する処を以てし出版の数ハ汗牛充棟も啻ならず加ふるに小説ハ美術なりと云ふ事稍く社会に現れてノベルとかロウマンスとか口にするを覚ふ(浪廼家盧生『倭織錦新機』序、絵入自由新聞、九・一七)

小説はいまや戯作ではなく、「政治小説、諷刺小説、寄託小説、寓意小説、科学小説」、「ノベルとかロウマンス」といった西洋的概念へといきなり立身出世したのである。この価値上昇にともなつて、小説に熱烈な需要が生まれることになつた。「万篇一律陳々相依り見るもの聴くもの皆小説の咄しなり」という有様で、小説熱は社会現象にまでなつていたのである。

このような状況と、新聞メディアとが無関係であつたはずがない。前述のように、当時の紙面には小説作品が大量に掲載されていた。多くの新聞紙にとつて、小説こそが主力商品だったのである。新聞メディアは自らの存続と繁栄のために、多数の読者を魅了する小説を載せなければならない。これゆえ各紙は、この小説隆盛の季節に直面して、その熱気を取り込むための方策を実行したのだ。

では、明治二〇年前後の小説熱に、新聞小説はどのように対応したのか。そしてその結果、いかなる文化が新たに生成したの

か。近代日本における小説の歴史は、純文学（とくに写実小説）にかぎられるべきものではない。当時生産された小説総体から見れば、純文学の数量はほんのわずかにすぎないからだ。本稿は、当時の主要な小説発表の場である新聞メディアを考察することで、既成の文学史とは異なる観点から、近代日本の小説史ひいては文化史の一端を再現する試みである(2)。

二 絵入朝野新聞の場合

たとえば、絵入朝野新聞を考察することからはじめたい。同紙は当時、新聞小説を盛んに発表していた代表的な活字媒体のひとつである(3)。

まず、小説熱の到来前、同紙がどのような小説を掲載していたかを確認する。同紙は日本社会を文明化するために、本心では「西洋小説体の統物語」^{せいやうせうせつたい つぎものがたり}、すなわち改良主義小説を掲載したかった。しかし、明治一九年（一八八六）年後半までの時点では、それがどうしてもできなかったのである。そのことは、同年六月二三日から二六日に掲載された、新聞小説をめぐる一連の社説を見れば明らかである。

この社説は、同紙の連載小説を批判する投書を掲載することからはじめられる。投書は、新聞小説の多くが「御維新前の事がらにて男子方の野蠻時代」^{おぼろのやばらじだい}を舞台としており、現在から見て「智識の立後れたる筋」^{ちしきのたごれたるすぢ}であることを批判し、「為永流の小本とか人情本」^{たむけながりのせむじまほん}を廃止して「西洋文明国の面白き小説」^{せいやうぶんめいこくのおもしろなせうせつ}を掲載するよう要請した。これに対し、社説は投書の批判の正当性を完全に認めながらも、現実問題としてそれができないと弁明する。

絵入新聞の統物語の如きも今俄に旧来の風を一変し之に代ふるに西洋小説体のものを以てするときハ世間婦女女子などの中にハ何だ面白くもない斯様な（中略）長物語ハ見るも倦厭と仰やる無頓着の人定めて多からむ（中略）新聞紙ハ畢竟世間の野蠻風を除去し之を開明に誘導するの道具なればその読者の嗜好に合ふと合ハぬにハ毫も構ハず維新前の野蠻然たる話な

どハ一切之を記さず唯文明開化の事柄のみを載すべしと云ふが如き論者もなしといひ難けれども現に其局面に当る記者の身に取ってハ左様にすましこむで居ることを得ざるものあり(六・二六)

この文章は、「其故ハ新聞紙も数多の看客を得てこそ始めて社会に成立し世間を利する事も出来る訳にして」云々とつづく。要するに、同紙が「西洋小説体の続物語」を掲載できないのは、売れなくなることを恐れるからである。主要な読者たる「世間婦女子」は、「西洋小説体の続物語」を好まなかつた。実際、社説では、以前「改良を實際に試みむとして倏ち看客の御機嫌を損しお小言を頂戴し大に不評判を醸さむ」とした苦い経験が自白される。本当は「世間の野蠻風を除去し之を開明に誘導する」ために改良主義小説を掲載したいのだが、しかし新聞紙が一個の商品であり、小説がその中心である以上、「読者の嗜好」に反するものは掲載できないというわけだ。売れなければ存在自体が不可能になるので、本意ではあるが、非開明的な小説を掲載しつづけるのだと、社説は弁明しているのである。

明治一九年の同紙の新聞小説を確認すると、以下の通りである。著者名がないものは無署名。①『諷俗東日記』(一・七一—九)、②『貞操雪の松』(一・二九—三・六)、③『聴香楼主人』(一・三〇—三・九)、④『春雨物語』(三・七—四・一)、⑤『深山桜信濃家苞』(三・一〇—四・二〇)、⑥『優曇華草紙』(四・一三—六・九)、⑦『聴香楼主人』(三・七—四・一)、⑧『三人娘吾妻錦絵』(六・九—一六・二〇)中絶、⑨『右田寅彦』(名所図会)滋賀漣』(六・一八—八・一九)、⑩『台鏡富岳亦筑頂』(六・二〇—七・三〇)、⑪『昔廻人』(古金)金貸気質』(七・三—九・三)、⑫『右田寅彦』(封文)恋紅筆』(八・二〇—一〇・二二)、⑬『秋拾千種加賀染』(九・四—一四)、⑭『昼夜带好染色』(九・一五—一〇・二三)、⑮『前田香雪』(染枯)軋宅十二徒』(一〇・一三—一一・一九)、⑯『柳橋大王石由来』(一〇・二四—一二・三一)、⑰『地球生』(二双の名花)薰陶の力』(一一・一六—一二・二六)。

前掲社説の言う「西洋小説体の続物語」とは、投書が批判したものの対極にある新聞小説、すなわち近代社会を舞台とし、開明的理念に基づいて物語世界が設計された新聞小説を指すと言えよう。該当する作品はまず①である。これは、零落した士族の

青年書生、岸沢清輔が華族の公爵とその妹に気に入られ、彼女と結婚するとともに洋行するまでの物語である。その物語世界がどのようなものか、たとえば以下の場面が典型的であろう。

清輔ハ起ち上りて電話機の傍に近寄り鉛筆を口に銜み西洋紙を机上に展べて何事ならむと眼を凝らし器械の指示を見詰め居たるが何思ひけん秒時あつて愕然と鉛筆を投げ棄て驚くが如く又羞るが如く赧然になりて下に座し両手を組みて言語も無く茫然たること半晌許やうくにして四辺を見廻し「この電話機ハ邸内の各室に延くのみなならず主人公の出仕の役者より邸へ架けたる一線の電話線にも繋がり居りて公私の用を便ずる例ゆゑ定めし主公が緊要の御用ならむと思ひの外誰が串戯にや訳も無き艶書に齊しき今の電話その本人ハ知れざるが岸沢清輔とわが名を宛て伝せし辞ハ正しく婦人何者かハ知り申戯に事を欠き由ない悪誣をするものかなト打領づきつ、袂を搜りて襟元の冷汗を手中に押拭ひつ、默然として居たりけり（『諷俗東日記』一・一三）

岸沢清輔は公爵の屋敷に書生として寄宿しており、彼に懸想した公爵の妹が電話機を通じて愛を告白するという場面である。当時もつとも裕福で上層に位置する家庭での出来事であり、西洋紙と鉛筆という組合せといい、電話機というコミュニケーション手段といい、「手巾」で汗を拭う所作といい、この物語世界が当時改良主義者に憧憬された西洋的価値観に準じて成立しているのは明らかであろう。この物語世界は、西洋世界を日本的に模倣することによって設計されているのだ。

すでに指摘されているように(5)、この①が「改良を実際に試みむとして倏ち看客の御機嫌を損しお小言を頂戴し大に不評判を醸さむ」とした「西洋小説体の続物語」のひとつであったと推定される。本作は読者にまったく受け入れられなかったに違いない。実際、その後②から⑬にかけて、すべてが「御維新前の事がらにて男子方の野蛮時代」を舞台とした作品や「為永流の小本とか人情本」のような作品であり、開明的理念とはほど遠い世界観によつて制作されているのである。

その内容が簡単に見ていくと、②は金満家の愛妾ふたりの数奇な運命をえがき、貞婦の方は幸福を手に入れ、奸婦の方は大火

傷を負い零落する物語であり、③は孝女が母親の病死、継子虐め、家財焼失などの憂き目に遭うも、許婚である旧同藩士の息子と結婚し幸福になる物語であり、④は豪農の長男が父親死後に継母とその実子（義弟）に邪険にされたために家出をするも、義弟と和解して一家繁栄する物語であり、⑤は信濃の旧家の娘ふたりの悲惨な人生をえがく物語であり、⑥は父母と兄を殺害された女が同藩出身の武士の夫に助けられて仇敵を討つ物語であり、⑦は義理の姉妹ふたりの数奇な運命をえがき、姉は病死するが妹は芸妓になったあと商家の若旦那に身請けされて幸福になる物語であり、⑧は中絶だがある武士の妻が火事騒ぎの際ほかの娘と間違ってしまった、自分の娘と生き別れてしまう物語であり、⑨は乱暴武士に難癖をつけられた侠客が一端はその武士に斬殺されたとされるも実際は生きており、もともと情婦であった女侠客と再会して一家繁栄するという物語であり、⑩は水戸藩士の兄弟が維新後それぞれ貞節な女性と結婚するまでの物語であり、⑪は金貸のさまざまありようを誇張的にえがく気質物であり、⑫はある修行僧と裕福な家の娘が将来の仲を誓い、逐電して紆余曲折があるもめでたく結婚するという物語であり、⑬は悪漢と毒婦が改心してそれぞれの家を再興する物語であり、⑭は遊蕩により財産を失い商家を没落させた男が家を再興するまでの物語であり、⑮は転宅にまつわる悲喜交交をえがく一種の気質物であり、⑯は二千石の旗本でありながら邪悪な当主やその奸臣などが悪事を重ねた挙げ句、お上によって懲罰されるという物語である。

これらの作品の多くは近代以前を舞台としている。明治期現在を舞台とする作品でも、開明的な思想が前面に押し出されることはない。えがかれるのは大抵、御家騒動、仇討ち、悪漢毒婦の跳梁跋扈、商家の男女の恋愛など、新聞小説の読者が以前から慣れ親しんだものであった。絵入朝野新聞は、①の失敗に懲りて、②から⑯まで非開明的な小説を掲載しつづけたのである。

三 絵入朝野新聞の場合（承前）

しかし、明治一九年（一八八六）はこれだけで終わったのではない。最後に、①以来久しぶりに「西洋小説体の続物語」が復活することになる。⑰の『薰陶の力』である。どのような内容だったのか。梗概を私に示す。

近未来の明治二五年（一八九二）。ドイツ人の父と日本人の母のあいだに生まれたおらいは、日本人母に育てられ、教育がない女である。彼女は日本人骨董商の後妻であり、幸之助という息子までなしながら、俳優を誘惑したり、西洋手品師と不倫したりする。一方、日本人の父とイギリス人の母とのあいだに生まれたおらいは、母に文明的な教育を受けたため、独立不羈の精神を備えている。彼女が日本人裁縫師とのあいだにもうけた息子珠之助も利発な少年である。珠之助が優秀であることに感心したある海軍少佐は、自分の娘と婚約するよう希望する。本人の意思による自由結婚という前提で、珠之助と彼女は婚約することになる。一方、おらいは不倫の末に先非後悔して改心し、信仰の道に入る。

右の梗概から明らかなように、本作では文明的な教育を受けているか否かがその登場人物の価値や運命を決める。本作のいたるところで、語り手が教育の重要性を説く。たとえば以下。

教られざるよりハ寧ろ生れざるがよしとか富田の妻おらいハ女子の教育に至つてハ当時我日本杯の迫ぶべくもあらざりし文明国の胤なりと雖も其母たる者ハ教育不完全なりし日本下等社会の者たりしゆゑか毛髪と眼色に文明を表するのみ其所為に至りてハ亦言語道断とも云ふべく夫れに反し加世の妻おらいハ其父日本人たりと雖も文明婦人の教育を受け僅に裁縫店の妻女に過ぎざるも其志操と行為に至りてハ実に霄壤畜ならざる差別あり爾れバ各自の子を教ふるも自然遺伝する処あるにか幸之助と珠之助の氣象を以ても知るべきなり（『薰陶の力』明一九・二一・一五）

本作の主題が端的に表された箇所であろう。おらいは旧態依然とした日本人母に育てられ教育がないゆゑに浮薄な女とされ、一方、おらいはイギリス人母に教育を授けられたゆゑに賢明な女とされる。そして母親の気風は自ずから子供へと伝わりと示唆される。本作は、改良主義に基づいて日本人を更新しようとしているのだ。おらいが西洋人の娘でありながら教育がないゆゑに墮落したということは、逆に言えば、日本人であつても教育さえあれば西洋人的たりうることを意味しよう。本作は読者に、教育によつて西洋人的であれというメッセージを送っている。このような「西洋小説体の統物語」が、明治一九年の掉尾を飾つた

のであった。

この『薰陶の力』は、第二紙面に、「西洋写真木版(6)」の挿絵とともに華々しく連載された。では、絵入朝野新聞がこのような「西洋小説体の続物語」をふたたび、しかも特別あつかいしながら連載したのはなぜか。それは同紙が小説隆盛の気運に棹さそうとしたからにはかならない。同紙は小説熱の勃興を察知して、以前から掲載しなかった改良主義小説を乾坤一擲持つてきたのだ。本作の序に以下のようにある。

爰に小説改良の説喋々と起り新聞紙の統譚も今にしてハ小説の組合に編入せられ事実の報道よりハ先其の脚色の可否を論じ美術的とか云ふ点より甚と六ヶ數傾きとハなれり然れども該の改良や大に余等も賛成する処にして小説の改良に至らば寔に幼童の男女輩をして文明に誘導するの大利益ある事万々保証したる処なり(『薰陶の力』序、一一・一六)

新聞小説も小説の一種なのだから改良されねばならない、われわれはそれを実行し「幼童の男女輩」を文明に導くのだ、と作者地球生は新聞人らしく意気込む。第一節で述べたように、西洋翻訳小説や政治小説の叢生、そして坪内逍遙の登場などにより、小説の地位は劇的に向上していた。この潮流を見すえて、絵入朝野新聞は、新聞小説を近代的に改良するという勝負にもう一度出たのである。そしてこの挑戦は、今度はみごとに成功した。最終回付記で、作者が以下のように述べる。

地球生曰す本編幸ひに江湖の喝采を得本日を以て結局とせり而して来一月一日の紙上よりハ更に新硯を研ぎ起草すべしとの囑托により尚一層考案を凝し看客諸君へ満足を与へしめむ事を図れり希ハク本編同様御愛読あらむ事を(『薰陶の力』一一・二六)

本作が好評であるのは事実であった。実際、翌年には、おなじような「西洋小説体の続物語」が次々と掲載される。「読者

の嗜好」そのものが、小説隆盛を背景として変容していったのである。読者、すなわち「世間婦女」「幼童の男女輩」の多くはもはや、小説が西洋的であることを毛嫌いしていない。むしろ、小説隆盛の気運を受けて、多少背伸びしてでも、新しいもの・勢いがあるものを理解したいという衝動を感じるようになっていたと見られる。絵入朝野新聞はこのような読者心理を察知して改良主義小説の掲載に踏みきった。そして、それによって、同紙は小説隆盛を自ら促進させたのである。

翌年、明治二〇年（一八八七）における連載の最初は、予告どおり地球生の『秀葉談』（一・一―？）であった。欠号により最後まで閲読できないが、これは大阪の農民出身の青年書生と、伯爵の家扶の長女が艱難辛苦を経て結婚するまでの物語であると思われる。二番目は大久保夢遊『名譽^{はまれの}酒^{かみ}龜鑑』（二・三―一・三〇）。これは舵取りの息子が幕末、倒幕運動の密書を持つていた廉で入牢するも、牢屋の中にいた尊王攘夷派の知識人から学問を授けられ、その後脱獄してフランスに留学し、工学士の学位を取った後に帰国して、兼ねてからの婚約者と結婚するという物語である。婚約者の女の方は居留地の宣教師のもとで勉学に励み、教師となっている。三番目は同『佳士^{佳士}双縁^{双縁}奇話』（二・？―三・一八）。これは国会開設百年後の日本を舞台とし、急進的な壮士が現政権の保守党の首領を暗殺しようとするも、首領が丁度病死し、政權交代が起こるという物語である。壮士は最終的に佳人と結婚し、イギリス人の援助で商業を営んだのち国会議員となる。四番目は同『新説^{しんせつ}雨後月』（三・一九―四・二二）。これは百年後の日本を舞台とし、農民を庇って自首し死刑となった義民的人物の息子が自力で大学校を卒業し、法学士の免許状を得るといふ物語である。そして五番目に、坪内逍遙『此処^{こゝ}やかしこ』（三・二六―五・一四）が連載される。これは中絶だが、父親の死後困窮した息子が艱難辛苦を経て、陸軍省の某氏一家に見出され、書生として引き取られるまでがえがかれている。明治二〇年に入ってから連載されたこれらの新聞小説が、前年の②から⑩までの作品とは異質であることは明白であろう。絵入朝野新聞は、小説隆盛の潮流に乗るべく舵を切った。そしてもうひとつ、注意すべきは、このとき、同紙が新聞小説の読者を「世間婦女」「幼童の男女輩」のみに留めていない点である。つまり、同紙の新聞小説は、知識層、とくに書生をも読者に想定しはじめたと見られる。実際、『秀葉談』から『此処^{こゝ}やかしこ』では、青年期の男（書生）が主人公となっている。修養を積んだすえに立身出世する彼らを読んだのは、まさに彼ら自身であったに違いない。青年男性のサクセスストーリーを喜んで読むの

は、第一に当の青年男性（書生）なのである。

明治二〇年、絵入朝野新聞は、フランスに留学して工学士の学位を取ったり、国会議員となったり、法学士の免許状を取ったりする男を主人公とすることで、書生をも読者に取り込もうとした。新聞小説の想定読者は、小説隆盛の季節のなかで、「世間婦女子」「幼童の男女輩」だけではなくなっていたのである。

四 懸賞小説

ここまで、当時の代表的な新聞メディアのひとつ、絵入朝野新聞を検討してきた。しかし、連載小説を改良主義に基づいて再編成し、その想定読者を知識層、とくに書生へと拡大するという現象は、同紙にかぎられるものではない。たとえば、よく知られるように、読売新聞は坪内逍遙の助言により明治一九年（一八八六）一月より紙面改革を実施し、翌年その逍遙を客員として迎える。ほか、管見の範囲では、絵入自由新聞、改進黨新聞、朝日新聞（大阪）なども、明治二〇年前後より明らかに小説の形態をあらためている。

これらは小新聞と呼ばれる、もともと庶民層を想定読者としていた活字媒体だが、知識層を想定読者とし、小説を掲載することなどはほなかつた大新聞もまた、小説に対する態度をあらためている。郵便報知新聞は明治一九年一〇月より「通信報知叢談」というシリーズで翻訳小説を積極的に掲載しはじめ、これに東京日日新聞がつづく。

くりかえせば、小説隆盛を受けて、新聞小説はその想定読者を書生にまで拡大しだしていた。そしてこの流れは、二〇年の後半にある企画を生み出すことになる。すなわち、懸賞小説である。

小説隆盛にもなつて、書生達のあいだである現象が起こっていた。小説家になりたがるという現象である。小説の社会的地位が上昇している以上、これは当然の帰結と言えよう。第一節に引用の文章でも、「読人より作者が多く買者より売手が多く」（世界の著述悉皆小説）とか、「堂々たる学者先生より微々たる青年書生まで筆を舐めて文を売んことを企つるが故に」（金香

『露』序)などと、小説作者の急増が皮肉まじりて指摘されていた。以下の社説では、それがより詳細に批判されている。

晩青堂店前に白のハンカチーフの鼠色に化けたる臨時用風呂敷より一篇の草稿を出し是ハ此れ春の舎大人に擬し畢生の力を尽して書いたる新小説なり序文も彼の先生に頼む積り、どうか買つて下さいと云ふ今シエクスピアあれバ天狗書林の肆頭に私が草した此の小説お引取を願ひ度と哀請する薄衣襟々の明治馬琴あり四畳半小暗き下宿部屋の片隅に据ゑたる一箇の机上に坪内文学士の著ハされたる二三冊の小説神髓を散らかして天晴ヂツケンスを気取る小説家、脚色と意向を混合して區別するを知らざるも猶且デボウ糞を喰へと云ふ天狗あり猫も杓子も貧書生もワット貧書生程小説家を気取る者の沢山なるハナント畏れ入つた驚き入つた現状に非ずや(何ぞ小説家の多き)改進黨新聞、明一九・一二・二七社説)

晩青堂は「春の舎大人」こと坪内逍遙の『二説当世書生氣質』(明一八一—一九)『内地未來之夢』(明一九)の版元であり、天狗書林は本の大量出版で当時有名であつた兎屋誠を指す。引用では、これらの書店に草稿を売り込みに行く自称小説家達のだが、点描されているのだが、その自称小説家の最たるは書生であると指摘されているのである。彼らはシェークスピア、曲亭馬琴、坪内逍遙、デイケンズ、デフォーを気取り、あるいは上段から罵倒し、こぞつて小説家になりたがっているという。立身出世を目論む彼らは、新しいステータスとして小説家という業種を狙いはじめていたのだ。

おそらくこの現象に眼をつけて、懸賞小説は開始された。管見の範囲では、そのもつとも早い例は郵便報知新聞に見られるものである(8)。以下がその募集広告である。

- 一 著作、翻訳、ノ別ナク最モ面白キ者ヲ第一トス
- 一 一枚二十行廿五字、(一ページ十行)ニテ三十枚ヨリ少カラス八十枚ヨリ多カラサルヲ要ス
- 一 一等賞、金三十円、二等賞報知新聞二ヶ年分、三等賞同壹ヶ年分

一 八月三十日ヲ以テメ切トス（郵便報知新聞、明二〇・七・一九）

しかし、受賞作が紙上で公開されることはなかった(9)。このことは、郵便報知新聞がかならずしも懸賞小説を重視していなかったことを示す。おそらく同紙にとって、小説は上記の「報知叢談」で充分であったのである。もともと知識層を相手としていた同紙であつてみれば、懸賞小説を利用して、今さら書生にアピールする必要もあまりなかった。

新聞経営上、懸賞小説をより必要としていたのは、もともと庶民層を相手としていた小新聞の方である。小新聞は、懸賞小説の募集を通じて、小説を発表したいという書生達の欲求に応えるそぶりを見せ、それによつて自らを書生のためのメディアとして売りだそうとしたものと推される。具体的には、改進黨新聞や絵入朝野新聞が懸賞小説の募集を行っている。

ここでは改進黨新聞の事例を検討していく。同紙はまず、明治二〇年（一八八七）一〇月三〇日に、来月一五日を目途として紙面改良を行うと予告し、小説を三編掲載すると宣言する。と同時に、懸賞小説募集を第一紙面にて大々的に発表するのである。以下がその「懸賞小説募集広告」である。

本社紙面改良主意書に基き左の項目の合格する懸賞小説を募る

一 政治的、歴史的、社会的に關したる小説たる事

一 文章ハ成る可く流暢優美にして婦女子にも解し易きを要す

一 回数ハ廿五回以上四十回以下一回廿五字詰七十行以上毎回新趣巧妙の下絵を添るを要す
一期日ハ來十一月卅日ヲメ切期限とす

一 賞金左の如し

第一等 金五十円／第二等 金三十円／第三等 金十五円／但第三等以下見るに足るものハ応分の謝儀を呈す又た右の懸賞文ハ藤田鳴鶴君を始め諸名士の詮撰を経て等級を定め批評を加ふ

一起草者ハ投書に町名と雅名を御記載ありたし合格の上ハ之を紙上に報告し更に姓名を請ふて紙上に掲ぐべし（改進黨聞、一〇・三〇）

郵便報知新聞のものに比べ、応募者に細かいところまで形式を指定していることが分かるだろう。改進黨聞は、内容、想定読者、文字数から下絵——当時は小説家が挿絵の下描きをする慣習があった¹⁰——にいたるまで設定したうえで、懸賞小説を募集している。鳴鶴藤田茂吉という著名な知識人を審査員としその名を明記していること、賞金が比較的高額であることも合わせ、これらのことは、同紙がいかに懸賞小説を重視していたかを示す。

それまで基本的に二編であった小説を三編に増やすのは、やはり、改進黨聞が同時代の小説熱をさらに吸収して、経営体力を上げようとしたからであろう。このとき必然的に、掲載するに足る小説の数量的確保が課題となる。この課題と、前述の書生間における小説家志望者の急増とを合わせて勘案した結果、編み出されたのが右の懸賞小説募集であったと考えられる。懸賞小説とは、新規の小説を調達する手段であると同時に、書生達の願望を利用して売上向上を図る手段でもあったのである。

審査結果が発表されたのは翌年明治二十一年（一八八八）五月一〇日であった。一等賞は該当なし、二等賞は福士北水『龍吟』、三等賞は加納鍛策『旅館の奇遇』である。『龍吟』は創作で五月二日から六月一六日まで、『旅館の奇遇』はレッスングの戯曲『ミンナ・フォン・バルンヘルム』（一七六七）の翻訳で六月一七日から七月三日まで、紙上にて連載された¹¹。

『龍吟』の方を見てみると、これは、東北地方の農夫の息子がまず同地出身の頭官に気に入られて養育され、つぎに横浜居留地の商人に気に入られてアメリカに行き、さらにニューヨークの商人に気に入られて同地の大学にて理財学を学び卒業し、そして帰国後は地方振興に尽力するという物語である。典型的な立身出世小説と言えよう。本作は、環境や感情に流されることなく、理性的な克己の果てに成功を手にする書生の物語なのである。その作者がいかなる人物で、読者をどのように想定しているかは、たとえば主人公の以下のひとりごとからも知れる。

「さてハ今のハ夢であつたか夢ハ未来の出来事を予め表するものなりとハ西洋の学士達も主唱するさうだが然れば今の夢も宿志を達する喜ぶべき兆であらまいかイヤ（これも迷想だ通理が許さん彼の惹遜翁も「道理に存せる限ハ徒らに吉凶の表兆もてそが心を喜憂の間に迷はずからず然らずんば生涯ハ迷信の餌食たるを免かれず（Your whole life will be a prey to superstition）」と言ハれたものを斯る浅ましい事に心を迷ハすとハ実に思慮の足りない証拠だモウ何事も想ふまい迷ふまい総ての迷想ハ理刀を以て切断した（『龍吟』六・一）

引用中の英文はサミュエル・ジョンソン『ラセラス』（二七五九）が原拠と思われる。募集広告では「婦女子にも解し易き」ことを条件としていたが、しかし、物語の進行上とくに必要でもない英文をわざわざ挿入すること自体、『龍吟』が知識層をも読者に想定していることを示す。そして、おなじ点から、作者もまた知識層である可能性が高いと推測できる。本作は、書き手も読み手の多くも、書生あるいは書生あがりだったに違いない。書生の立身出世をえていることも、そう判断する根拠となる。改進新聞はこのような「西洋小説体の統物語」を当選させ紙上に連載することで、書生達に自らを売り込んだのだ。

同様のことは絵入朝野新聞の懸賞小説についても言える。まず、同紙は明治二〇年二月一四日、来年初頭からの紙面改良を予告し、従来二編であつた小説を三編に増やすと宣言する。そして、二八日から「懸賞小説募集広告」を出す⁽²⁾。受賞作は、波辺霞亭『柳のかつら』（明二一・三・二四―五・二二）、西峽逸史『夢の世がたり』（三・二五―五・六）、閑存堂主人『姫小松』（四・五―五・二九）。『柳のかつら』は自由主義の男が大恩ある友人を県会議員選挙に当選させようとし、一端は反対党の金銭力により負けてしまふも、最終的には当選させる物語。『夢の世がたり』は優秀で品行方正な書生が情欲を一端断つて洋行し、帰国後、待っていた佳人と結ばれる物語。『姫小松』は両親を失つた姉弟が幕末維新の困難を経て明治八年に幸福になる物語。このうち『姫小松』は旧来の作風であり、保守的な読者にも配慮して選ばれたのであろう。しかし、『柳のかつら』『夢の世がたり』は、書生をも視野に入れた作品であつたはずだ。絵入朝野新聞の懸賞小説もやはり、書生を中心とした新たな読者層にアピールすることを、ひとつの眼目とするものだったのである。同紙にとつても、懸賞小説とは、書生達を読者に想定した際に

必要となる訴求手段であった。

五 黒岩涙香

以上、明治二〇年前後に到来した小説隆盛の季節に、新聞小説がどのように対応したのかを探ってきた。考察をまとめておく。(一)新聞メディアは、それまで読者の不評を考慮して掲載できなかった「西洋小説体の続物語」を積極的に掲載するようになった。主要読者である「世間婦女」「幼童の男女輩」が、小説熱を受けて、その嗜好を変化させていたからである。(二)同時に、新聞メディアは、連載小説の想定読者を知識層、とくに書生にまで拡大するようになった。小説熱を受けて、書生達が新聞小説をも読みうる状況になっていたからである。(三)さらに、新聞メディアは、懸賞小説という企画を新たに実行した。小説家という業種が新たなステータスとなり、書生達が小説を発表したがる現象が起こっていたからである。懸賞小説とは、書生という新たな読者層を開拓しようとしたとき、新聞メディアに必要とされたものであった。

小説隆盛の季節を迎え、新聞小説の読者は全体的な性質を大幅に更新したものと推される。これをふまえたうえで、本稿では最後に、この小説熱が黒岩涙香の登場へとつながったことを指摘しておきたい。

明治一〇年代、「西洋小説体の続物語」を拒絶していた読者が翻訳小説をも拒絶したのは想像に難くない。新聞メディアにとって、西洋の翻訳小説を掲載することは躊躇される難事だったのである。実際、絵入朝野新聞は、明治一六年(一八八三)の創刊号より操竹女史訳『月経あり雨梨花春史』かじゆんしを連載するも中絶に終わり、その後長きにわたって翻訳小説を掲載していない。絵入自由新聞もまた、創刊当初こそ宮崎夢柳の『冤枉むじつの鞭苔』(明一五・九・一一〇・二八)や『ガーネット、ウオルスレーの伝』(明一六・一・一四―二・一)を連載したものの、その後長きにわたって翻訳物を載せることはなく、明治一八年一月に『落馬羅馬談落馬栄華の夢』落馬談を久しぶりに連載するも、やはり中絶に終わっている。同紙の新聞小説を主に担当したのは、戯作者仮名垣魯文の門弟であった。

しかるに、この状況が明治二〇年前後に一変する。改進黨が三等賞として翻訳小説を当選させたことから分かるように、翻訳小説の需要が一挙に高まるのである。そして、この需要を最大限取り込んだのが、間違いなく、黒岩涙香の翻訳探偵小説であった。涙香の最初の翻訳探偵小説『法廷の美人』は、明治二十一年（一八八八）一月より挿絵なしで紙上に連載され、大好評であったらしいが⁽¹⁴⁾、この反響は小説隆盛の季節でなければ考えられないことだ。以下は、涙香の登場を説明する際に、かならず引用される発言である。

余ハ屢々探偵談を訳したる事あり然れども文学の爲にせずして新聞紙の爲にしたり、魯文派の小説が稍や読者に飽られたる様あるを見て、斯る続き者も西洋にハ有りとこの事を知らせ度き積りにて訳したるのみ、小説には非ず続き物なり、文学に非ず報道なり（黒岩涙香「探偵譚に就て」万朝報、明二六・五・一一）

涙香はここで、純文学（写実小説）と自身訳の探偵小説を峻別している。自身の翻訳探偵小説はあくまで新聞小説であつて、純文学ではないというわけだ。現在の文学史が写実小説に偏重して構成されていることから、この認識は正しいと言えよう。しかし、涙香の登場自体が、小説隆盛、つまり坪内逍遙の登場を主要な根拠とする小説の価値上昇によつていふことも、あらためて指摘しておかねばならない。おそらく、近代日本初期における探偵小説の生成は、逍遙の登場なくしてはありえなかつた。涙香の成功は、「ノベル」登場をその決定的な基礎としていたのである⁽¹⁵⁾。

註

(1) 初期新聞小説を総合的に研究したものに、戦後では、平井徳志『新聞小説の研究』（一九五〇年、朝日新聞社）、玉井乾介「新聞小説史」（『文学』二二一六、一九五四年）、浅井清「新聞小説の変遷」（『国文学』二八一、一九六三年）、柳田泉「明治初期の文学思想」（一九六

五年、春秋社)、興津要「(つづきもの)の研究」(『明治開化期文学の研究』一九六八年、桜楓社)、高木健夫『新聞小説史 明治編』(一九七四年、国書刊行会。同氏にはこれに先だって『新聞小説史稿』一九六四年、三友社がある)、本田康雄『新聞小説の誕生』(一九九八年、平凡社)、佐々木亨『明治戯作の研究』(二〇〇九年、早稲田大学出版部)などがある。

(2) 明治二〇年前後の新聞小説についての総合的研究には、何と言っても高木前掲書が備わる。ほか、前掲の平井、玉井、浅井、本田の論考などに言及がある。本稿は先学の業績を参照しながらも、蒐集した資料や新聞小説を具体的に検討し、実証的な手続きを通じて新しい文学史的知見を見出したい。

(3) 絵入朝野新聞は明治一六年一月創刊され、明治三二年五月に江戸新聞となった。土屋礼子『大衆紙の源流』(二〇〇二年、世界思想社、二七四頁)によれば、明治一九年における同紙の号当たりの平均発行部数は二〇三七部で、全体の上位に位置する。また、同紙の新聞小説に関する研究に、林原純生『近代文学と(つづき物)―「絵入朝野新聞」からの問題提起』(『日本文学』四二四、一九九三年)がある。ただし、この論と本稿とは見解を異にする。林原氏は読者が「西洋小説体の統物語」(後出)を好まなかったことを重視し、読者の不変性が近代文学の基礎となったと論ずるが、本稿は読者が不変であったとは考えない。

(4) 聴香楼主人は柳田泉「高畠藍泉伝」(『随筆明治文学』第三卷、二〇〇五年、平凡社、二七九頁。原書一九三六―三八年)によれば高畠藍泉の別号だが、藍泉は明治一八年一月に逝去している。

(5) 林原前掲論。

(6) 『薰陶の力』序、一一・一六。「西洋写真木版」とは木口木版のことらしい。国文学研究資料館編『木口木版のメディア史』(二〇一八年、勉誠出版)を参照。

(7) 本年二月については欠号につき未見。『双縁奇話』については改題単行本『政治小説深山桜』(明二〇一一、銀花堂)で閲読した。また、『此処やかしこ』中絶の事情などについて、柳田泉『若き坪内逍遙』(一九六〇年、春秋社)に詳しい。

(8) たとえば高木前掲書は明治二六年一月の読売新聞によるものを懸賞小説募集の最初としている(一九〇―一九三頁)。修正が必要であろう。ただし、郵便報知新聞のものが最初とはかぎらない。引きつづき調査したい。

(9) 審査結果は明治二二年三月一日の紙面最後の方に掲載されている。四七通の応募があつたらしい。第一等は村井寛『黄金島』、第二等は福士北水『噺々談』、第三等は加納鍛策『旅店の一日』(翻訳)。第一等受賞者は当時まだ小説を発表しことがなかった村井弦齋。この『黄金島』が、弦齋の小説デビュー作『加利保留尼亞』(『日本之時事』明二・四一八。未見)である可能性もある。福士北水と加納鍛策については未調査。ただし、後者については黒谷了太郎編『宮尾舜治伝』(一九三九年、吉岡荒造刊)に言及がある。加納は「和歌や小説の創作には優れた頭脳を持つて」おり、「尾崎紅葉、山田美妙、朝比奈知泉等の諸名家は同君の同窓であつた」(七二頁)という。註11

も参照されたい。

- (10) この点、近年、「明治中期における口絵・挿絵の諸問題」(『湘南文学』四九、二〇一四年)など、出口智之による一連の研究がある。
- (11) 興味深いのは、実はこの二等、三等受賞者が、郵便報知新聞の懸賞小説の二等、三等受賞者でもある点である。註9参照。前述のように、同紙は受賞作を紙上に掲載しなかった。郵便報知新聞と改進黨系の活字媒体であり、近しい間柄であったことを考慮すれば、改進黨新聞は郵便報知新聞から受賞作を融通してもらったのではないか。つまり、改進黨新聞は懸賞小説を募集したものの思うような佳作を得ることができなかったため、郵便報知新聞から受賞作を秘密裏にもらい受け、題名を変えて掲載したのではないか。
- (12) 形式は改進黨新聞のものとはほぼ同様で、これに倣ったと思われる。
- (13) 無署名。原作はコリンズ『アントナイナ』。この点、川戸道昭・中林良雄・榎原貴教編『明治期翻訳文学総合年表』(二〇〇一年、大空社)を参照。
- (14) 曾我部一紅「黒岩先生と余」、涙香会編『黒岩涙香』一九二三年、扶桑社、七八一頁。なお現在、欠号により『法廷の美人』初出を見ることはできない。
- (15) 涙香登場の文学史的意義については、拙稿「仮名垣派から黒岩涙香へ」(『阪神近代文学研究』一七、二〇一六年)でその一端を考察した。

付記 本稿における著者名は便宜上、代表的なものを用いた。引用は、やまと新聞・改進黨新聞・絵入自由新聞・絵入朝野新聞は国立国会図書館のマイクロフィルム、郵便報知新聞は柏書房の復刻版、万朝報は日本図書センターの復刻版による。引用に際して旧字は新字に改めた。斜線は改行を示す。漢字表記、ルビ等に誤りと思われるものもあるが、一部を除いて原文通りとした。また、紀要「言語社会」(言語社会研究科、二〇一九年三月)の特集「新聞メディアと文学 明治二〇年代」も合わせてご覧いただきたい。